

石神遺跡北方の琴柱と使用樹種

はじめに 弦楽器である琴には、弦を承けて調律する機能をもつ柱が付属する。この琴柱は、日本では弥生時代後期の江上A遺跡例¹⁾が最古の例とされる。

さて、伊藤律子の集成によれば、琴柱は日本国内で121点の出土例がある。そのうち、樹種が判明しているのは半数程度である²⁾。

ところが、2002年度から2006年度にかけて実施した石神遺跡北方の発掘調査で、実に178点もの琴柱が出土したのである。これまでの出土例を凌駕する数量である。さらに、これらは7世紀後葉を中心とする時期の所産であり、重要な資料であることは疑いようがない。

石神遺跡北方の琴柱は、一部が紀要で報告されているに過ぎない。ここではまず、主要な遺構から出土した琴柱について、実測図と樹種同定の結果を提示したい。

なお、祭祀具あるいは形代という意味では、「琴柱形」の名称が適切であるかもしれない。ただし、祭祀具と実用品との峻別が難しい場合も少なくない。したがって、本稿では、煩雑さを回避するためにも、「琴柱」の名称を使用しておく。

遺跡と遺構の概要 奈良県明日香村の石神遺跡は、斉明朝の饗宴施設や天武朝の官衙施設と理解されている。この中枢部の北側、山田道との間の空閑地が石神遺跡北方である。のべ3,422㎡が調査された結果、溝や土坑が認められるのみであった。石神遺跡北方では、土地を活発に利用していなかったのである。

さて、琴柱は、造成時につくられた廃棄土坑と思われるSK4069やSK4122、排水路のSD4089・SD4090、SD4121、SD1347などから出土している。本稿では、出土量の大半を占める溝の資料を紹介したい。

遺構の変遷をみると³⁾、まずSD4089・4090とSD4121が開削される(図99)。そして、これらの溝を埋め立てて

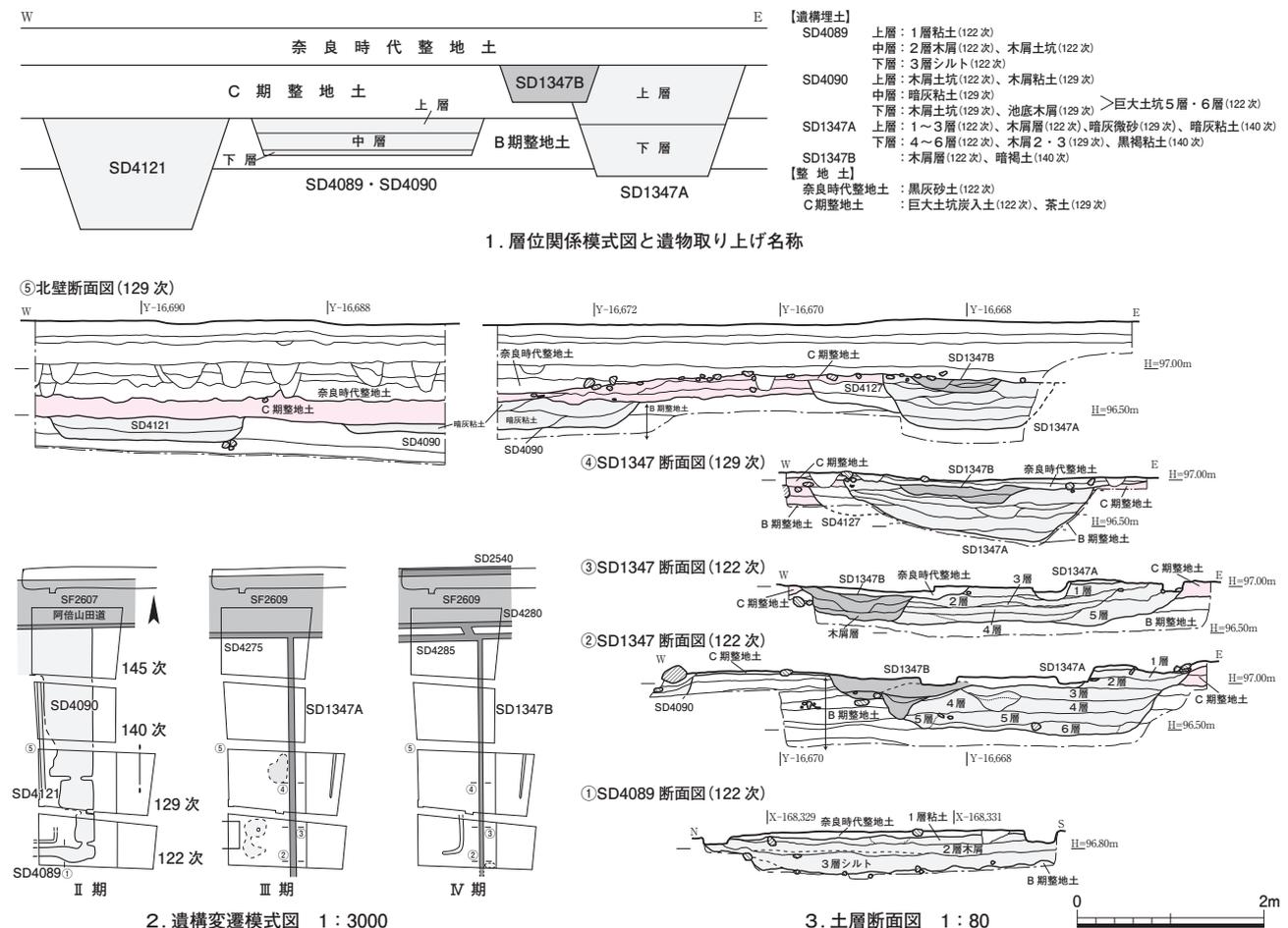


図99 石神遺跡北方の遺構変遷と断面図

整地土（C期整地土）を敷いた後に、SD1347Aが掘削される。その後、SD1347AはSD1347Bに造り替えられる。なお、SD4089・4090は山田道との関係から、7世紀中葉に開削されたと考えられている。

各溝から出土した土器群は、SD4089・4090、SD1347A、SD4121ではいずれも飛鳥Ⅳとされる。SD1347Bの土器群は、飛鳥Ⅴと理解されている。したがって、遺構の変遷は認められるが、短期間内での出来事と考えられる。概ね、7世紀後葉の天武・持統朝にあたると考えてよからう。

石神遺跡北方の琴柱 178点の琴柱のうち、117点を図化した（図103～105）。形態にかなりの多様性が認められる。本稿では詳述しないが、大きく2つに区分できそうである。脚部が太い一群と、細い一群である⁴⁾。

次に、使用痕と木取りの特徴を述べておこう。まず、弦受け溝に弦のあたりや磨滅といった使用痕が認められないことがあげられる。このことは、これほど多量に出土する琴柱の意味を考える上で、重要とならう。琴柱に弦を張って使用した形跡がないのである。人形、刀形、斎串といった多量の木製祭祀具と共存していることも考えあわせると、これらの琴柱が祭祀を目的としたものである可能性が高いと判断できる。なお、多量の燃えさしも共存しており、祭祀に火を使用していた可能性もある。

続いて、木取りをみてみよう。本稿未掲載の琴柱も含めて、全178点の木取りの比率を示したのが図100-1である。板目材と柾目材とは、ほぼ同じ比率となるのがわかる。追柾目材も一定量あるが、少ない。

つまり、石神遺跡北方の琴柱では、板目材と柾目材のどちらかの木取りが優位となるわけではない。このことは、琴柱の製作にあたって、特定の木取りを選択していたわけではなかった状況を示している。

いま少し検討を深めるために、比較資料として、7世紀後葉の斎串の木取りをみてみよう。図100-2は、石神

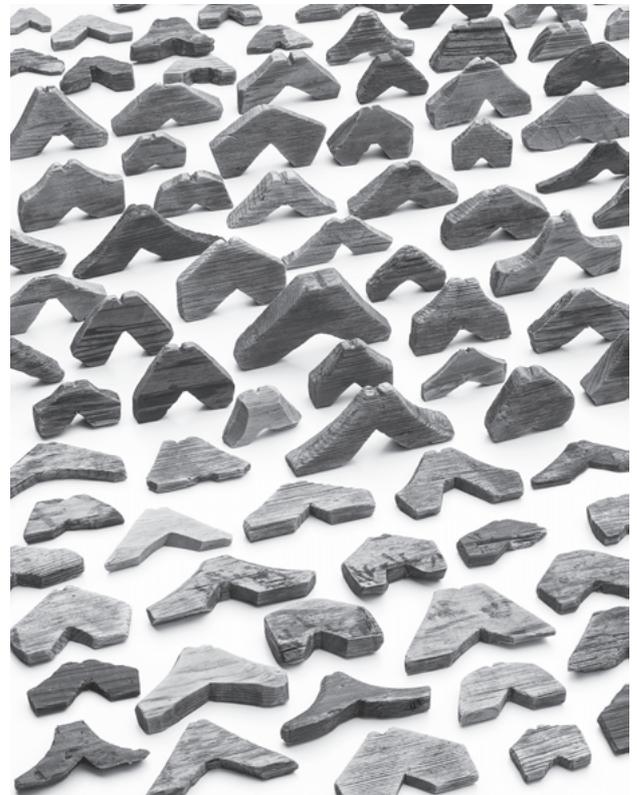


図101 石神遺跡北方から出土した琴柱

遺跡北方の斎串、同3は藤原宮跡運河SD1901Aから出土した斎串⁵⁾の木取りをまとめたものである。石神遺跡北方の斎串では板目材の割合が、柾目材の2倍となる。また、藤原宮跡SD1901Aでも、板目材の比率が高い。

いずれも板目材が多い点は、先にみた琴柱の場合とは異なる。ただし、柾目材も3割程度が認められ、一定の比率を占めていることは見過ごせない。斎串の製作においても、明確な木取りの選択はなかったものと判断できよう。

したがって、琴柱や斎串といった薄板材から製作される木製祭祀具では、板目材も柾目材も用いられていたことがわかる。そして、その製作にあたって、木取りはそれほど重視されなかったと考えられる。 (和田)

樹種同定の方法 樹種同定は、いわゆる「徒手切片法」でおこなった。これは、遺跡から出土した木質遺物に関して現在広く普及している方法である。木材組織の三断面（木口、柾目、板目）の切片を片刃または両刃の安全剃刀によって採取し、切片を樹脂で封入したプレパラートを生物顕微鏡で観察し、そこで把握できた木材組織の特徴を標本や文献と対比して樹種を割り出すものである。

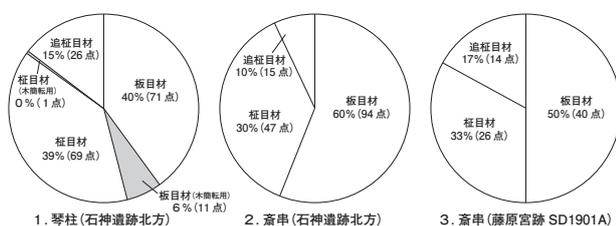


図100 7世紀後葉の木製祭祀具における木取りの傾向

ただし琴柱は、数ある出土木質遺物のなかでも極めて小さく脆弱な部類に属する。通常、出土木質遺物に関する切片の採取は、できるだけ目立たない場所を探しておこなうのが一般的であるが、琴柱の場合、とくに完形品では目立たない場所というものの自体がない。そのため、観察に適した切片を採取しようとすればするほど、かえって考古資料としての価値を損ねる恐れがある。

そこで、今回の樹種同定にあたっては、2010年刊行の『平城宮木簡七』以降、奈文研が木簡に対して適用してきた作業方法を基本的に踏襲した。すなわち、目視または実体顕微鏡による遺物表面と木取りの事前把握を徹底したのち、割れ等のために生じた破面を中心に切片採取をおこない、採取箇所は後から参照できるよう必ず実測図に記録した。また、通常であれば木口、柾目、板目の三断面からもれなく試料を採取するところ、遺物への影響を最小限に抑える観点から、採取断面ができるだけ少なく済むよう配慮した。とくに針葉樹の場合は、識別の要点が柾目面にもっとも端的に現れることから、その他の断面の採取は控えた。広葉樹の場合も無理な切片採取はおこなわないこととし、切片の採取ができなかった断面については、次善の策として、別途高倍率の実体顕微鏡観察も取り入れ、木材組織の特徴を可能な限り把握できるよう努めた。

(藤井裕之/客員研究員)

使用樹種の傾向 石神遺跡北方の琴柱に使用されている樹種は、ヒノキ、スギ、アスナロ、コウヤマキが確認される(図102)。このほか、種の特定には至らなかったが、モミ属、広葉樹散孔材、広葉樹環孔材もわずかに認められる。使用樹種の傾向をみると、ヒノキが圧倒的に多く、半数を占める。これにヒノキ科とヒノキ属を含めれば、実に95%を占めることとなる。

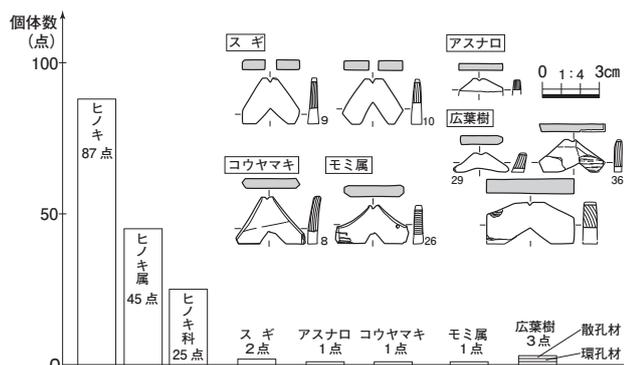


図102 石神遺跡北方出土の琴柱にみる使用樹種と傾向

近畿地方では、古墳時代や古代以降にヒノキが多用される現象が指摘されている⁶⁾。たしかに、藤原宮跡や平城宮跡といった都城から出土する木製品についても、その多くがヒノキである。また、柱材などの建築部材も、一部にコウヤマキがみられるものの、多くがヒノキであるとされている。

古代の都城では、一般的にヒノキを使用していたのであり、もっとも多く用意された樹種といえる。先述のとおり、石神遺跡北方の琴柱は、ヒノキが過半数を占める。そのほかの木製品や建築部材における使用樹種の傾向と一致する。

つまり、石神遺跡北方の琴柱を製作するにあたって、特別に材を用意したわけではなく、都城ないしその周辺の遺跡にもっとも普遍的に用意されていた材を使用したものと考えられよう。樹種の選択性はみられないのである。このことは、琴柱に限らず、「木製模造品」と呼ばれる祭祀具の多くに共通する。

おわりに 本稿では、琴柱の実測図を提示するとともに、樹種同定の方法を明記した上で使用樹種も示した。また、できるだけ出土した遺構と層位を示したつもりである。本来であれば、共伴する土器群も明示した上で、遺構と遺物の年代を示すべきではあるが、現状ではその作業も容易ではない。

基礎作業としても、不充分なところが多いと自認している。琴柱以外の木器を資料化することとあわせて、今後に期したい。多少なりとも、本稿の作業が琴柱の型式学的研究、あるいは古代木器研究に資するところがあれば幸甚である。

(和田)

註

- 1) 岸本雅俊ほか編『北陸自動車道遺跡調査報告』富山県教育委員会、1981。
- 2) 伊藤律子「琴柱—その出現から衰退の検証—」『東海の路』、2004。
- 3) 小田裕樹ほか「石神遺跡(第19・20次)の調査—第145・150次—」『紀要 2008』。
- 4) 型式学的な検討や製作技法の観察については、別稿を用意している。
- 5) 1978年度に奈良文化財研究所が調査した、藤原宮第20次調査で出土したものである。
- 6) 山田昌久「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究』特別第1号、植生史研究会、1993。

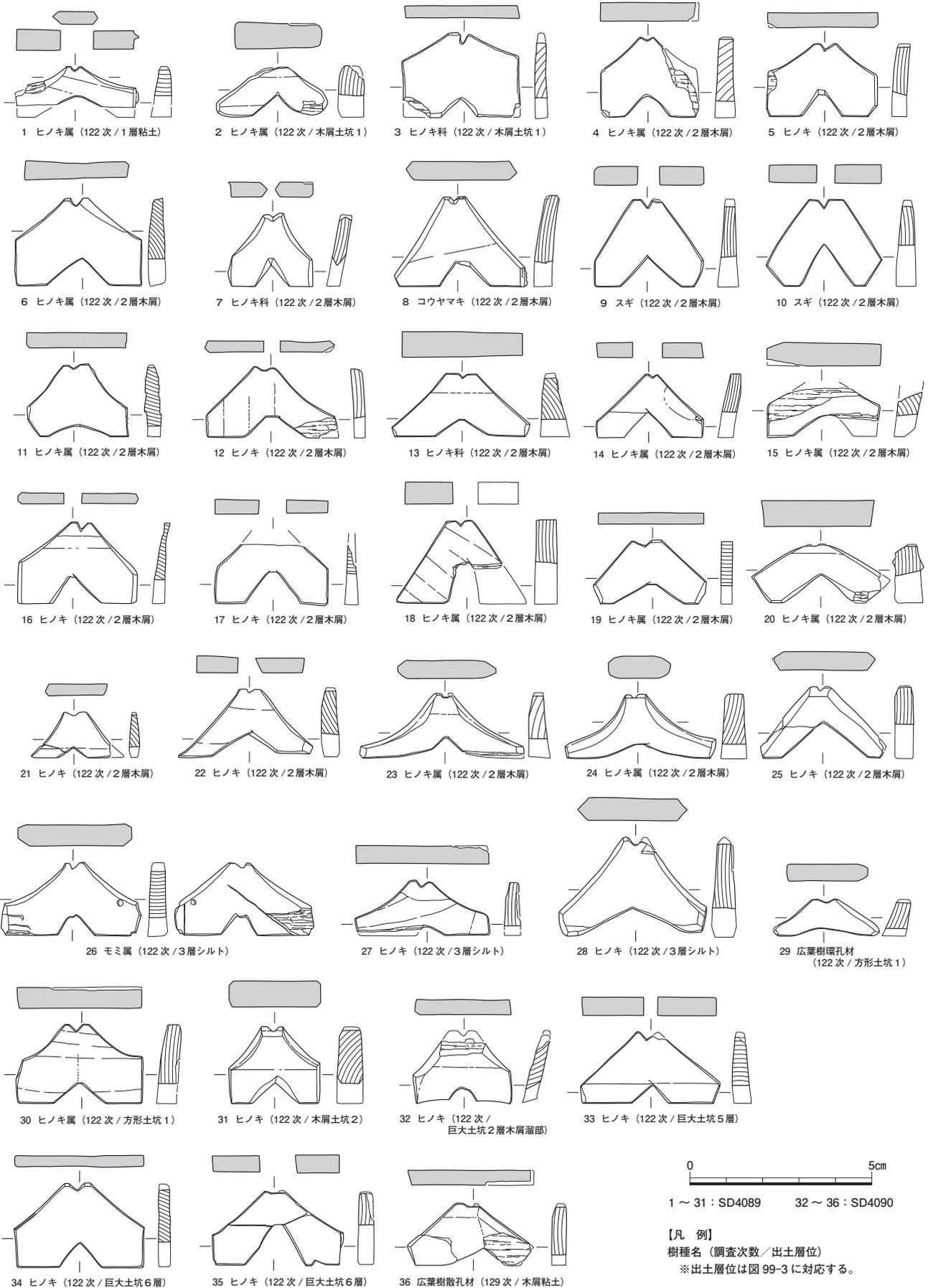


図103 石神遺跡北方から出土した琴柱の諸例 (1) 2 : 3

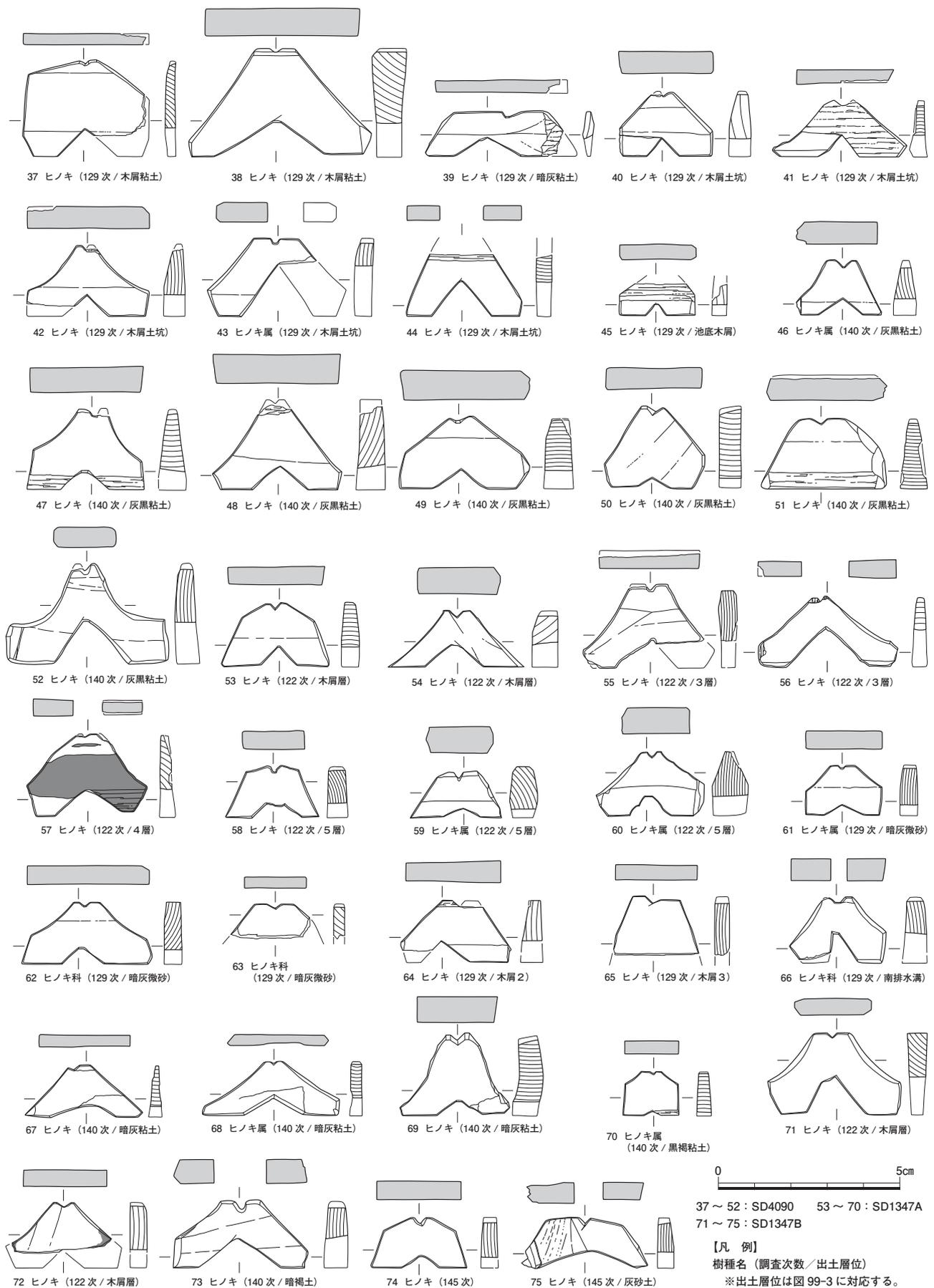


図104 石神遺跡北方から出土した琴柱の諸例 (2) 2 : 3

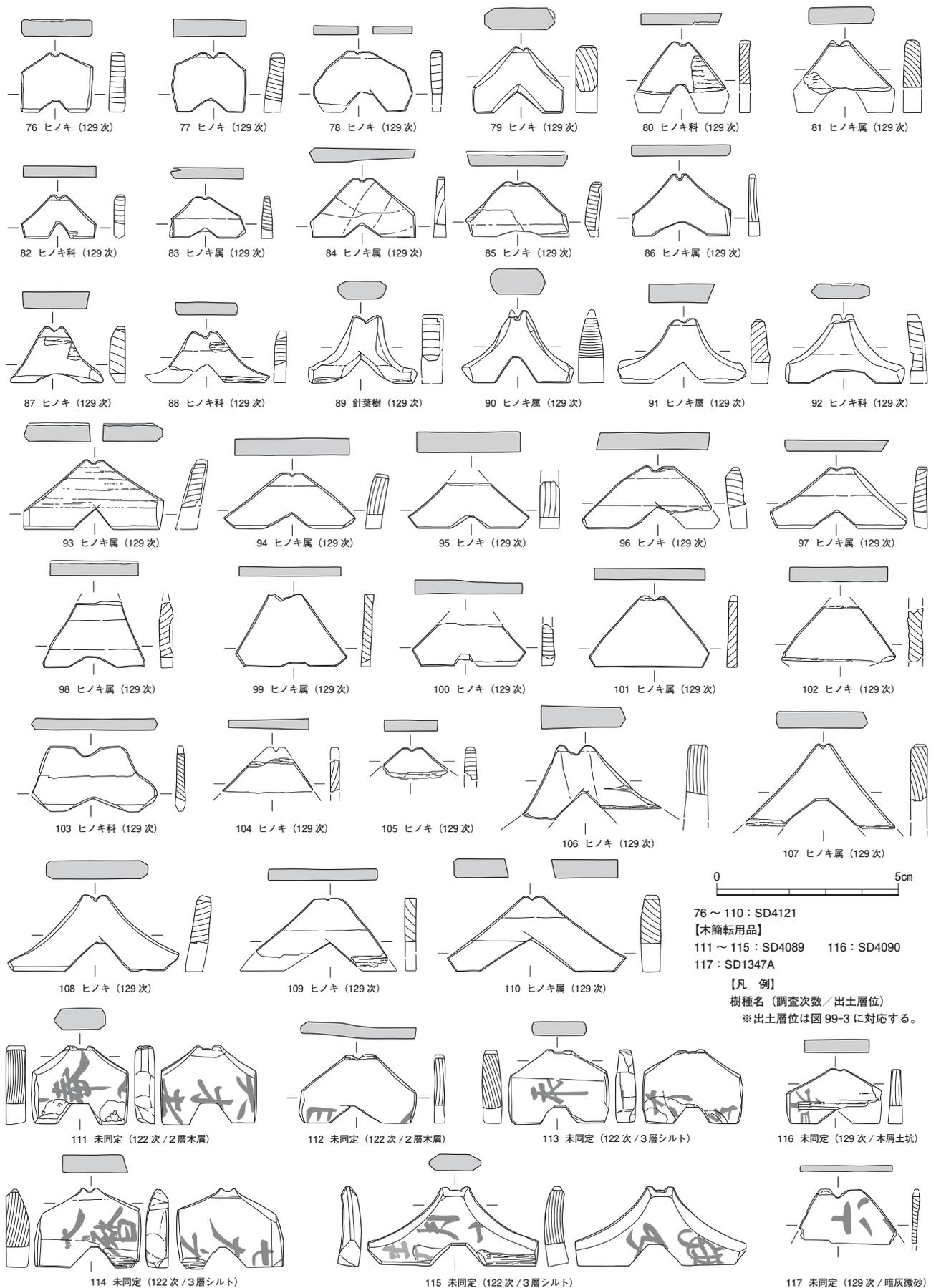


図105 石神遺跡北方から出土した琴柱の諸例 (3) 2 : 3